

# 名城大学 海外臨床薬学研修

研修期間：令和元年 6 月 30 日～元年 7 月 14 日

所 属：名城大学薬学部薬学科

学 年：5 年

学籍番号：1409733324

氏 名：久保 美穂子

## 1. 参加目的

日本よりも薬剤師の職能が幅広いアメリカにおいて、薬学生がどのように学んでいるのか、薬剤師がどのように働いているのか、日本との違いを自分の目で見て、今後の自分や日本の薬局・病院において何が必要なのかを考えるため。

## 2. 研修内容

【研修テーマ】 これからの薬剤師の在り方を考える

【研修日程】

月日	研修内容
7月1日	オリエンテーション、ウェルカムパーティ
7月2日	医療保険制度、医薬品情報の収集、薬物動態学について学んだ。放課後にアクティビティでショーを見に行った。
7月3日	糖尿病の病態、糖尿病薬の化学的な授業、他大学の大学紹介
7月4日	休日（自由行動）
7月5日	休日（自由行動）
7月6日	休日（自由行動）
7月7日	休日（自由行動）
7月8日	糖尿病薬の作用機序、代謝機構や、治療薬の選択方法について学んだ。 名城大学の大学紹介を行った。
7月9日	糖尿病薬の薬物動態や構造に基づく比較、薬物治療学について学んだ。
7月10日	薬局見学(Santa Monica homeopathic pharmacy)、インスリン製剤についての学習
7月11日	インスリンを中心とした糖尿病の薬物治療について、Q&A
7月12日	薬局見学(PLAZA pharmacy)、卒業のセレモニー

【研修内容の詳細】

韓国、インド、台湾、香港など、様々な国・大学の薬学部の学生が集まり、ともに研修に参加した。グループワークも多く、初日に小グループ（1グループ7名程度で計11グループ）が作られ、そのメンバーで固まって講義を受けた。本研修では糖尿病について、化学的な視点での薬理学と、症例を

使いながらの臨床的な視点での薬物治療学の講義を受けた。また、その日の講義にかかわる事柄について、毎日各グループが自分たちの課題の薬物について調査し、みんなで協力してパワーポイントを作り上げて課題として提出を行った。さらに、それらの集大成として、最後に課題の薬についての化学的な問題を一つ、臨床的な問題を一つ作り、Q&A でグループがクイズを出し合った。

薬局見学は2か所行き、1つは OTC を中心とした個人薬局で、漢方薬やアロマなどを扱っていた。もう1つは USC の大学病院にある院内薬局であった。

また、講義の合間に、実際に医療の現場で働いている病院薬剤師の方や栄養士の方の、仕事内容などの話を聞いた。

### 3. 感想

私は、この研修を通じて、日本とアメリカにおける薬剤師の立場の違いを痛感した。アメリカでは、病院内でも「薬の専門家は薬剤師」として信頼されており、薬物治療のプロトコルを作るのが医師ではなく薬剤師であるという。多職種連携・チーム医療という点でも、アメリカはとて進んでいて、薬剤師の方の話を聞いても、栄養士の方の話を聞いても、医師や多職種と対等の立場に立っていて、それぞれがそれぞれの専門家としてチームの中で活躍しているという印象を受けた。また、院内薬局には診療所のような、ベッドがある小さな部屋があり、そこで必要に応じて患者さんの問診を行ったり、血圧や血糖値の測定を行うときいた。日本では薬剤師にはそのような診察のようなことを行う権限はないため、とても衝撃的であった。また、アメリカでは病院にかかる（医師の診察・治療を受ける）ことが高額であるため、薬局は人々にとって身近な医療機関であり、薬剤師はともすれば医師よりも信頼されているようだ。一方で、大学で講義を受けていたが、講義は日本に比べて圧倒的にディスカッションや学生に主体的に参加させるものが多かったものの、内容自体に日本との大きな違いは感じなかったし、知識という面において、決して日本の薬剤師が引けを取っているとは感じなかった。インスリン製剤に触れたり、血糖値を測定したりという実習も、すでに日本でやったこともある。しかし、アメリカでは、日本よりも AI 化が進み、AI が計数調剤を行い、またテクニシャンの方が薬剤師の調剤業務を肩代わりしていたが、そのことに対する危機感や不安というものは薬剤師の方から全く感じられなかった。それは、薬剤師が調剤業務ではなく、患者と相対することや、薬物治療の根幹に関わっているからだ。もちろん、保険制度の違いや、薬剤師の法的な権限の違いなど、薬剤師・薬局を取り巻く社会的な背景も大きく異なることから一概に比較し、真似をするということとはできない。しかし、今後、地域の医療機関として機能するために薬局がどう変わっていけばいいのか、自分が患者さんにより信頼していただくためにはどうすればいいのか、チーム医療・多職種連携とはどうあるべきなのかを考える手助けとなった。

私は今回の研修を通じて、これからの薬剤師の在り方の一つを、実際に見ることができたと思う。

私は患者さんにとって、「ただ薬を詰めて渡す人」「お医者さんの処方ミスを見つけるためだけの人」ではなく、「薬について相談できる人」「健康や医療にかかわることを気軽に相談できる人」になりたい。そして、薬の専門家であるということに、誇りと責任をもてる薬剤師になりたい。

これから私は、日本において薬局実習・病院実習に行くこととなるが、今回の研修を経て、「もっと学びたい」と思った気持ち、「このように信頼される薬剤師になりたい」と思った気持ちを忘れずに実習に臨み、最大限の学びを得たい。また、多職種連携においても、このアメリカで得た経験を生かしていきたい。

最後ではあるが、今回の海外研修にかかわってくれたすべての方に感謝したい。